

## 父役割が父親自身に与える影響

— 仮説構築に向けて —

冬木春子・本村汎

### The Impact of Father's Role on His Personal Development : Toward the Construction of Hypotheses

Haruko Fuyuki and Hiroshi Motomura

#### はじめに

近年、父親の存在あるいは役割に社会的関心が支払われるようになり、父親の役割を再検討する状況が生じてきている。このような背景には、父親をめぐる社会が大きく変化したことがあげられる。その一つには、産業構造の変化によって「職住分離」が著しく進み、父親が実際に働いている姿を見たことがない人が増加し、父親像の形成が難しくなったこと、さらには、女性の少産少子化や長寿命化によって、女性のライフスタイルが変化したことがあげられる。今や共働きが九百万世帯を越え、勤労者世帯の約三分の一を占めている。これらの結婚後も働き続ける女性は、男性あるいは父親の扶養者としての役割を補助するため、さらには自己実現のために、働いていると言えよう。このような状況に伴い、近年、女性の地位向上や男女共同参画型社会の達成を目指す動きが日本でも潮流となり、父親も家事や育児責任を担う必要性があるとする認識が高まっている。このような社会変化を反映して、マスメディアも、父役割が変化していることを指摘している。例えば、子どもの保育園の送り迎えをしている「育児を行う父親」が紹介されたり（東京新聞1. 17. 1996）、さらには、「夫の立ち会い出産」をテーマにとり上げ、父親自身がこれまでとは異なる新しい父役割をつくり始めたこと、また家族との絆を確認できたこと、そして、夫に芽生える育児意識などを紹介している（毎日新聞1. 18. 1996）。このように、日本においても父親の育児参加が期待され、注目され始めていることが伺えよう。

さらに、「女性の暮らしと仕事に関する世論調査」においては、「今後どのような男性が多くなった方がよいと思いますか」の質問項目に対して、家事や子育てに積

極的に参加する男性を望んでいることが明らかにされている。また、アカデミックな分野においても、柏木らを中心として、『父親の発達心理学』さらには、『子どもの発達と父親の役割』が出版され、父親の育児参加が注目され、それらが子どもに与える影響、さらには、父親自信に与える影響について検討されている。

アメリカに目を向けると、LaRossa（1988）が指摘するように、父親はbreadwinnerとしての役割の他に、従来母役割であるとされた、育児や家事もする“アンドロジナス”型の役割を理想型として、期待されているが、日本では、それが今、イデオロギー化しつつある。しかし、日本の社会では、従来からのbreadwinnerとしての父役割が依然として根強く、イデオロギーになりつつある、このアンドロジナス的な理想型としての父役割は、ある父親たちにとっては、ひとつの「圧力」源になり始めてきていると思われる。

そこで、本論文においては、先行研究の考証という方法をふまえて、父親の育児参加が父親自身の心性にどのような影響を与えているかを明らかにすると同時に、そのメカニズムについて、明らかにしていくことを目的としたい。メカニズムについては、イデオロギーとしてのアンドロジナスな父役割規範と、実際の父役割行動との関係性に焦点を当て、さらには、その関係性についての父親自身の主体的な対応や資源、そして、家庭と職場におけるコミットメントの要因を組み入れて、仮説構築を試みることを目的としたい。

#### 父役割が父親自身に与える肯定的影響<sup>1)</sup>

そこで、仮説構築に向けて、父役割が父親に与える影響について、どのような研究が行われていたかについて、

述べてみたい。

まず、アンドロジニアスな父役割が、父親自身に与える肯定的な影響について、外国における研究を紹介したい。Gronseth (1978) はノルウェーにおける仕事と育児を分担している、父親を対象に調査を行っている。この調査で父親は、育児に参加することにより、子どもとの親近感を強くもつようになること、子どもをより理解できるようになること、男性としてのアンデンティティを維持するのには、何の困難もないこと、そして、高い自尊心や自信をもち、さらには親役割について満足していることが明らかにされている。さらに、Russell (1982) においても、父親自身の自尊心と満足感が、子どもの世話係としての役割達成感と関係があることを見いだしている。

このように、父親の育児参加が高まることによって、子どもに対する親近感が生じ、それによって子どもの理解が高まり、さらには、父親自身の自尊心や自信を高め、親としての役割に満足し、結果的に、父役割を変えていくことが示唆されている。

一方、Grimm and Perry (1994) が行った研究においては、労働者階級における父親を対象として、父親の仕事の状況、父役割、父親の自尊心、さらにこれらと心理的幸福の関係を明らかにしている。この研究では、父親の仕事状況、すなわち仕事での肯定的な経験と否定的な経験が、父親の自尊心に影響を与え、それが子育てとしての父役割へ影響し、ひいては父親の心理的幸福に影響するとしている。すなわち、仕事で肯定的な経験をもつ父親は、父親自身の自尊心が高まり、子どもを心理的に管理せずに子どもを受入れることができ、その結果として、父親の心理的健康に良い影響を与えているとしている。

以上のように、GronsethやRussellの研究においては、「父親の育児参加」が父親の自尊心や自信を高めていくとしているが、それに対して、Grimm and Perryの研究においては、父親の育児参加よりも「仕事経験」から得られる充実感によって、父親の自尊心が高まり、子どもへの受容にもつながり、結果的に父親の心理的幸福につながるとしている。このことは、一口に父役割と言っても、父親の育児参加の役割よりも、職業的な役割が父親の自尊心を高める、重要な要因であることを示唆している。

次に、日本においては、発達心理学の視点から、柏木 (1996) は、親役割が親自身の発達に及ぼす影響を調べるために、子どもをもった現在の自分は、親ではなかった時と比べてどういう点が変化したと思うかについて調

査を行っている。因子分析の結果、「柔軟さ」「自己抑制」「視野の広がり」「運命の受容」「生き甲斐」「自己の強さ」の6因子が抽出されている。さらに、子どもや育児に対しての感情や意識を因子分析によって、「育児への肯定感」「育児による制約感」「子どもは分身感」の3因子を抽出している。したがって、父役割が父親に与える影響について、父親は、母親と同時に柔軟さや視野の広がり、謙虚な態度、自分の主張や立場に対する自己の強さなどを感じていること、また、父親が子どもは分身であると強く感じていることが確認されている。さらに、母親と比べて父親には育児による制約感が少ないが、母親が働いていると、父親は育児による制約感が増えることが明らかにされている。

さらに、若松・柏木・大野 (1996) は、柏木 (1996) によって明らかにされた、親の変化項目と新たにストレスに関する項目を加え、親としての成長・変化の指標として、柔軟さ、自己抑制・視野の広がり、運命の受容、生き甲斐・自己の強さ・ストレスなどからなる「尺度」を作成し、これらの尺度にもとづいて、実証的研究を行っている。その結果、母親が専業主婦の場合は、これらの尺度データと父親の生活状況、父親の育児参加、母親の就業、学歴との間には相関は見られなかったと報告している。すなわち父親の育児参加と、父親自身の成長や変化との間には相関はなかったとしている。しかし、母親が有職の場合、父親と子どもとの関わりとの関連では、育児をする父親の方が、育児をしない父親よりもストレスが少ないことが示されている。

このように、父親の育児参加がまだ少ないという現実を反映してだろうか、父親の親としての成長あるいは変化と、母親が就労していない時の父親の育児参加との変数との間に明確な肯定的な結果は得られていない。また、若松らの研究において、父親の育児参加が父親自身に与える肯定、否定の両側面からの研究が行われているが、主として肯定的な側面に焦点が当てられおり、「制約感」や「ストレス」などの否定的側面について（母親の就労により父親の育児行動が増えるにつれて、父親自身に制約感が増えるのかそれとも逆に、ストレスが減るのかについて）の知見は、柏木の研究と一致していない。

### 父役割が父親自身に与える否定的影響

そこで、父役割が父親に与える否定的側面における研究知見を紹介したい。この父親自身に与える否定的な影響に関する研究は、肯定的な影響として比較してあまり行われていない。

Greenberger and O'Neil (1993) と O'Neil and

Greenberger (1994) は、父親の役割葛藤と不安などの否定的な心理側面を三つの役割コミットメントとの関係で明らかにしている。Greenberger and O'Neil (1993) では、共働きで、幼児をもつ父親と母親を対象にして、心理的に重要だと思われる、異なる役割経験の側面を五つ設定し、調査を行っている。異なる役割側面とは、第一は対象者の夫（妻）としての役割、父親（母親）としての役割、及び仕事役割に対するコミットメントの程度である。第二は役割として期待される要求である。第三は、自分の役割評価である。第四は、役割遂行から得られる幸福感や満足感である。第五として、役割関係から得るサポートである。これらの役割経験と父親及び母親の心理的健康との関係を探っている。方法としては、重回帰分析を用いているが、結果としては、自分の親役割に対する評価が肯定的で、仕事へのコミットメントが高いに拘わらず、その仕事から得られる満足感が低いことや、仕事役割や親役割関係について配偶者からのサポートが低いことなどの説明変数が、心理的幸福の逆の指標である役割葛藤に影響を及ぼしていることが明らかにされている。さらに、O'Neil and Greenberger (1994) の研究においては、父親（母親）役割と仕事役割の諸側面に焦点を当て、この変数と父親自身の心理的幸福感や役割葛藤との関係を明らかにしている。結果として、父親の仕事役割に対するコミットメントが低く、親役割に対するコミットメントが高い場合に、父親の役割葛藤が最も低い結果になっている。一方、父親の仕事役割に対するコミットメントが高く、親役割に対するコミットメントが低い場合、役割葛藤が最も高い結果となっていることを示している。

以上の研究は、父親の役割コミットメントが父親に影響を与えることを明らかにしている。しかし、これらの研究においては、役割期待としての父役割、言い換えれば、規範としての父役割をどのように父親が認知し、コミットメントや行動を行っているか、また、それらが父親のパーソナリティにどのような影響を与えるかという点に関しては、明らかにされていない。

次に、アンドロジニアスな父役割が父親に与える否定的な影響を検討した研究として、LaRossa (1988) の、社会変化と父性（父役割）に関する研究がある。LaRossaは、父役割が父親に与える影響を説明する際に、文化（culture）としての父役割と行動（conduct）としての父役割を説明変数としてあげている。LaRossaによれば、文化としての父役割とは、人々に共有されている父親像や父役割についての規範、価値、信念のことであり、行動としての父役割は、父親が実際に果たしている

行動と規定している。LaRossaは、アメリカにおいて、近年“new father”の出現がマスメディアなどによって、盛んにとりあげられていることに注目し、近年の社会変化によって、文化としての父役割は急速に変化しつつあることを、次のように指摘している。

LaRossaによると、19世紀末から20世紀半ばまでは、父親は一家の稼ぎ手（breadwinner）であったが、1940-1965までの間で、性役割モデル（sex role model）<sup>2)</sup> となり、1966から養育者（nurturer）となり、1970年代以降は、両性具有的な父親（androgynous father）となり、社会の変化に対応する形で、文化としての父役割は変化してきたとしている。

しかし、行動としての父役割については、定義がこれまでの研究において、あいまいであり、そのために、父役割行動が、実際に時代ごとに変化しているかを検討することは、不可能であるとしている。そこで、LaRossaは、Lamb (1987) の調査を参考にして、父役割行動の定義の明確化に努力している。彼によれば、父役割行動にはEngagement（子どもとの関わり）、Accessibility（子どものニーズの充足行為）、Responsibility（子どもの世話や福祉についての責任）の3側面があるとしている。しかし、これまでの研究においては、父親の関わり、すなわち、Engagementのみが、父役割行動としてとり上げられ、子どものニーズの充足行為、すなわち、Accessibilityや、子どもの世話や福祉についての責任、すなわちResponsibilityは、依然として母役割として位置づけられてきことを明らかにしている。

以上のように彼は、人々が共有する文化（culture）としての父役割は、新しい、すなわち非伝統的な父役割へ変わりつつあるが、実際に父親がとる、ほとんどの「行動としての父役割」は、依然として伝統的であり、文化としての父役割と行動としての父役割が一致しないとしている。つまり、文化としての父役割は、社会変化の影響を受け移行しているために、人々が誤解して、行動としての父役割においても変化が生じつつあるかのように、解釈しているとしている。その結果、アメリカの父親たちの間では、理想型である文化としての父役割と、自分の行動としての父役割を比べて、「父親としては失格である」というような罪悪感や両価的な気持ちをもつ父親が、前世代に比べて増加しているのではないかとしている。

LaRossaの研究においては、文化としての父役割がアンドロジニアスなものになっていることを前提としているが、それをどのように受け止めて、父役割行動に具現化していくかは、その役割主体者の役割認知の仕方によ

って、それぞれ異なることが考えられる。その意味では、文化としての父役割の内面化過程や行動としての父役割についても、さらなる検討が必要であると思われる。

### 仮説構築に向けて

#### Ⅰ アンドロジニアスな父親に対する「対応類型」と父親への「心性」への影響

父役割が父親に与える影響に関する研究において、LaRossaがここまで述べてきた文化としての父役割と行動の父役割は、役割理論における規範（役割期待）と役割遂行というレベルの概念である。ここで述べる規範（役割期待）とは、言い換えれば、イデオロギーとして存在するアンドロジニアスな父役割であり、それは父親の役割認知、あるいは父親自身の人格構造に立脚する父親による役割規定、さらには父親の役割行動を規定する力をもつと考えられる。しかし、同時にイデオロギーとしての父役割、すなわち、文化規範としての父役割は、役割主体者の認知、規定、行動などによって影響を受けていくことが考えられる。

そこで、本論文では、LaRossaの枠組を参考にして、アンドロジニアスな規範としての父役割の内面化と、さらには、その規範と行動としての父役割の同時性・非同時性の類型化を行い、父親の心性に与える影響を考察することにする（図1・仮説1）。

父親	イデオロギーとしての アンドロジニアスな父役割		影響
	規範としての 父役割	行動としての 父役割	
アンドロジニアスな 父親イデオロギーに対する 対応型			心性
適応型 (A)	+	+	自信・自尊心
適応不全型 (B)	+	-	罪障感
規範逸脱型 (C)	-	+	拘束感・制約感
伝統型 (D)	-	-	伝統的同一性保持感情
革新型 (E)	+	+	変革志向性

図1 父役割が父親の心性に与える影響をめぐる仮説モデル1

（注）この分析モデルは、マートン（R.k.Merton）が社会のアノミー状況を分析するのに用いたものに類似しているが、その内容は異なっている。マートンは文化的目標とそれを達成するための制度的手段に注目し、その両者の関係を分析しているが、「心性」については全く言及していない。その点において、このモデルはマートンの分析モデルとは異なる。

図1の仮説モデル1で示されたように、Aグループ、すなわち、「適応型」の父親は、アンドロジニアスな父親を理想型と思っており、その役割規範を内面化するだけでなく、行動としての父役割においても、アンドロジニアスな父役割を果たしている父親である。このような父親は、高い自尊心や自信をもち、親役割に満足するな

ど、心理的に安定していることが考えられる。これはGronsethやRussellが指摘した父親像と一致する。このような父親は、マスメディアなどで、近年盛んにとりあげられている「育児をするnew father」であると言えるであろう。

次に、Bグループの父親、すなわち、「適応不全型」はどうであろうか。この類型にいる父親は、イデオロギーであるアンドロジニアスな父役割規範を内面化しているが、実際にはアンドロジニアスな役割行動を果たせず、伝統的な父役割を果たしている父親である。この類型にいる父親は、LaRossaによって、罪障感や両価的な気持ちをもっている父親像と一致する。この類型にいる父親は、大変仕事が忙しく、子どもと関わったり、コミュニケーションができず、内面化されたアンドロジニアスな父親像とのギャップで悩む父親である。このタイプの父親は、“外では組織人、家では疲れた人、父親として本音で語れる場がない”ことに気づき、父親としての役割や存在に悩んでいる姿がマスコミでしばしば描かれている。この類型にいる父親は、社会変化により現在アメリカで増えている父親である。日本においても、近年、アンドロジニアスな父役割がイデオロギーとして存在し始めていることを考えると、この類型にいる父親が今後増えていくのではないだろうか。

次に、Cグループにいる父親、すなわち、「規範逸脱型」はどうであろうか。この類型にいる父親は、アンドロジニアスな父役割規範を内面化していないが、実際の行動としては、状況適合的に無理して、アンドロジニアスな父役割を果たしている父親である。このような父親は、母親が働いていると、父親は育児量が増大し、それによって制約感を増大させていく父親像と類似している。つまり、アンドロジニアスな行動としての役割を果たしている父親が、育児による制約感・拘束感などの気持ちを持っていることが考えられる。このような父親も、今後、女性の社会進出により、増加してくるのではないだろうか。

次にグループDにいる父親、すなわち、「伝統型」はどうであろうか。この類型にいる父親は、アンドロジニアスな父役割規範は内面化しておらず、実際においても規範に適合した育児行動も果たしていない父親である。このような父親は、“old father”として、マスメディアなどでは、家族から時代遅れの邪魔者として揶揄されている父親像である。しかし、この類型にある父親たちは、伝統的父役割規範を内面化し、行動の上においても伝統的な行動をとっていることから、規範と行動とのギャップで悩むこともなく、比較的自分の役割に満足して、

伝統的同一性保持感情をもっているように考えられる。この類型にいる父親が、依然として多いのではないかと考えられる。

最後に、グループEにいる父親、すなわち、「革新型」の父親はどうであろうか。この類型にいる父親は、イデオロギーとしてのアンドロジニアスな父役割規範や伝統的な父役割規範を否定しており、これらに代わる新しい役割を模索し、変革志向型の心性をもちやすいと言える。

このように、アンドロジニアスなイデオロギーの内面化と実際の行動から、5類型に分け、父親の心性に与える影響について、仮説構築を試みた。現在においては、理想型としてのアンドロジニアスの父親を基準とした場合、「伝統型」の父親が一番多く、「適応型」にいる父親はまだ少ないのではないと思われる。しかし、今後社会の変化の影響を受けて、アンドロジニアスな父役割がより一般化されていく可能性を考えると、「適応不全型」、「規範逸脱型」における父親が最も増えていくことが考えられる。したがって、「適応不全型」、「規範逸脱型」の父親が、どのような資源及びコミットメントを持つことによって、「適応型」により近づくことが可能になるのかという観点から、さらにこれらを検討し、実証的研究を行う必要がある。

## II 文化規範としての父役割と行動としての父役割と、資源・コミットメントが、父親自身の「心性」に与える影響

仮説モデル1において、父役割規範と父役割行動の同時性・非同時性<sup>9)</sup>によって、父親の「心性」を説明したが、このモデルをさらに、拡張、発展させ、父役割規範の内面化と役割行動の関係性が、資源要因とコミットメント要因を媒介にして、どのように父親の「心性」に影響を与えるかを仮説化し、考察していきたい(図2・仮説2)。

まず、図2の仮説モデル2で示されたように、規範(役割期待)とは、イデオロギーとして存在するアンドロジニアスな父役割規範であり、父親自身の役割認知、あるいは人格構造に立脚した役割規定、さらには父親の実際の役割行動を規定する力をもつと考えられる。しかし、これらは相対的に独立しており、イデオロギーとしてのアンドロジニアスな父役割規範と、父役割行動を説明変数に設定することができよう。さらに、アンドロジニアスな父役割規範と父役割行動の間には相互作用的な関係性があり、それも父親自身の心性に影響を与えることから、父親の心理的影響を被説明変数に設定することができよう。これらの関係性に影響を与える媒介変数と

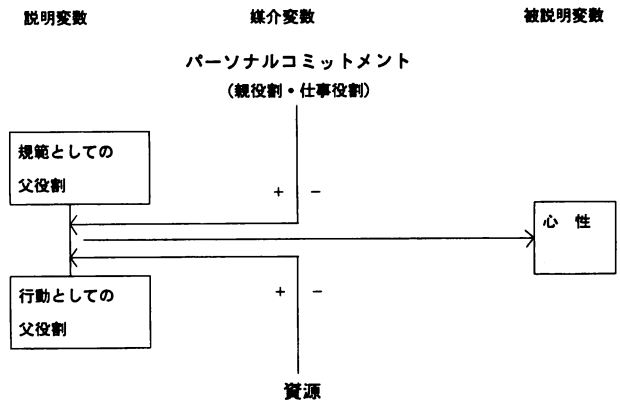


図2 父役割が父親自身の資源とコミットメントと心性に与える影響をめぐる仮説モデル2

して、父親が利用できる資源やコミットメントの程度が設定できる。

そこで、媒介変数としてあげた父親が利用できる資源であるが、これらは、規範としての父役割を内面化する過程、さらには役割行動などに、影響を与えると思われる。ここで言う資源とは、例えば、父親の「生活時間」や「ネットワーク」である。特に父親の仕事に関係した「生活時間」が父親の家庭生活に深く関連していることが、牧野(1987)が行った調査から伺える。牧野は、同じ会社に勤務する男性250名を対象にして、調査を行い、対象者の過半数の人が「仕事から解放された」と感じる時刻は午後9時以降であり、父親が家族と一緒に夕食を食べる日数は、一週間のうち週2～3回であり、中にはほとんどない人も17%にのぼっていることを明らかにしている。そして、牧野は、このような父親の仕事の忙しさと家庭生活に対する満足感の関連について、仕事が忙しいほど家庭を憩いの場と感じるわけでもなく、仕事の忙しさはむしろ家庭生活に対しても不満度を高める方向に影響していると結論づけている。

さらに、土谷(1992)が行った、父親の生活実態と父子のかかわりの関連性に関する調査においても、仕事と家庭への力の入れ方の程度に関して、仕事に力を入れている父親ほど、子どもに接することが少なく、一緒に遊ぶことが少ないことが明らかにされている。しかし、父親が家庭に比重をおき、家族とも接触できる時間的余裕があっても、父子のかかわりは多くなっておらず、父親の内面的意識が関係していることも示唆している。

このように、父親の仕事に関連する父親の「生活時間」、具体的には、父親の勤務時間、仕事から解放される時間、さらには仕事の忙しさや仕事と家庭への力の入れ方の程

度などが、父親の家庭生活に深く関連している要因であると思われる。

さらには、父親をめぐるネットワークが、父親の育児行動に影響を及ぼすことは、Riley (1990) が行った研究から伺える。Rileyは、70名の父親を対象として、父親のネットワークと子どもとの関わりについても調査を行っている。それは、父親のもつネットワークの量と質が子育てに与える影響についての調査である。結果としては、対象者の父親がもつ子育てのネットワーク（子育てについてのアドバイスを得る資源）の量の平均は5.1であるが、17%の父親が子育てに関するネットワークを全く持っていないことを報告している。また、父親のネットワークと、父親の子どもとの関わりとの関係については、共働き家族においては、友人や妻方の親戚とのネットワークをもつ父親が、より積極的に子どもの世話に参加していることが示されていた。特に、父親の友人とのネットワーク、つまり、父親の仕事関連において支援をしてくれる人、夫婦の問題について話せる人、情緒的な支援をしてくれる人、社会的な活動を共に行う人、金銭的な援助をしてくれる人などのネットワークが、父親の育児参加を高めていることが明らかにされていた。このように、父親のもつネットワークの質と量、さらにはネットワーク源が、父親の役割行動に影響を及ぼすと言える。このことから、父親のネットワークを媒介変数として組入れることができよう。

次に、父親の親役割あるいは仕事役割へのコミットメントの程度も媒介変数として設定することができる。コミットメントとは、Burke and Reitzes (1991) によれば、自分のアイデンティティに対する定義や基準と、他者からの評価及び、社会からのそのアイデンティティに対する適切な意味づけを一致させ維持させようとする力の強さを指している。すなわち、彼らによれば、高いコミットメントとは、その行動に深く関わることであり、それが人々のアイデンティティを作り上げ、支えるとしている。したがって、この意味では、父親が父親や職業人としての社会的役割規範と、自分のアイデンティティとを一致させるために、どの程度これらの役割にコミットメントしているかということは、父役割規範の内面化及び、父役割行動と関連があると思われる。このような視点に依拠すれば、父親の親役割あるいは仕事役割へのコミットメントの程度を媒介変数として組み入れることができよう。

このように考察してみると、アンドロジニアスな父役割規範と父役割行動の同時性・非同時性は、父親のもつ資源や家庭・仕事に対するコミットメントの程度によっ

て、影響を受け、ひいては、父親の心性にも影響を与えていくと考えられる。

## 要約と今後の課題

本論文では、近年の社会変化に伴い、父親に求められる役割が、breadwinnerとしての役割の他に、従来母役割であるとされた、育児や家事もする“アンドロジニアス”型の役割になりつつあることを指摘し、このアンドロジニアスな父役割は、イデオロギーとして、多くの父親に対して、「圧力」をかけ始めてきていることを問題意識として述べた。このような問題意識から、本論文の目的は、イデオロギーとしてのアンドロジニアスな父役割規範が、実際の父役割行動、さらには、父親の心性に、どのような影響を与えるかについて考察し、仮説構築を試みた。

そこで、仮説構築のために、父役割が父親自身に与える影響についての先行研究を考証し、二つの仮説モデルを導き出した。仮説モデル1においては、アンドロジニアスな父役割規範と父役割行動の同時性・非同時性の関係性が、父親自身の心性に影響を与えるとした。つまり、イデオロギーとしてのアンドロジニアスな父役割規範と、父役割行動の関係性を説明変数、父親の心理的影響を被説明変数とする仮説モデルの構築を試みた。その関係性は、次の5つの対応類型、つまり、「適応型」「適応不全型」「規範逸脱型」「伝統型」「革新型」に類型化され、それぞれに対応する「心性」が父親のなかに形成されるとした。さらに、仮説モデル2としては、これらの関係性に影響を与える、媒介変数として、父親が利用できる資源やコミットメントの程度が設定された。その意味では、仮説モデル2は、仮説モデル1を拡張・発展させたものと、言えよう。

本論文においては、社会変化の影響を受け、規範としての父役割、すなわち、イデオロギーとして存在するアンドロジニアスな父役割が、父親の役割行動を規定し、これらの関係性が父親に与える心理的影響をとりあげた。しかし、規範、あるいはイデオロギーとしての父役割は、役割主体者の認知、規定、行動などによって影響を受けて、変化していくことが考えられる。したがって、今後、規範としてのアンドロジニアスな父役割と行動としての父役割のギャップに悩み、罪障感や制約感を持ち始めている父親の増加を背景にして、より現実的に合意可能なイデオロギーが新たに創り出され、アンドロジニアスな父役割規範も変化していく可能性があると考えられよう。さらに、政策や職場制度などによっても、イデオロギーとしての父役割が影響されることを考慮すると、今後、

イデオロギーとしてのアンドロジニアスな父役割規範が変化していくことも考えられよう。

本論文において、現代の父親へ影響を与え始めているイデオロギーをアンドロジニアスな父役割としたが、さらに歴史的な視点から、日本においても近代から現代に至るまで支配的であった父親像を検討し、父役割イデオロギーの変化を明確にし、将来を展望していくことが必要であろう。また、社会的諸条件に規定されたイデオロギーとしての父役割を明確にすると同様に、父親自身どのようにイデオロギーとしての父役割を内面化し、自らの父役割定義と調和させ、自らの行動を決定し、父役割を遂行するかについて、これらの過程の検討を行うことも今後の大きな課題である。

## 注

(1) これまでの父役割・父親研究では、子どもは親の社会化の産物であると見なす傾向が強かったため、父子関係における父親の子どもに対する影響についての研究が多く行われてきた傾向がある。しかし、近年になり、親と子の社会化の過程は相互作用であり、親が子どもを社会化するように、子どもも親を社会化するという相互規定的社会化 (reciprocal socialization) の立場が強調され始め、ようやく家族社会学や発達心理学を中心として、子どもとの関わり合いによって、父親が親として、どのように変化し、成長したかについての研究が注目されている。

(2) LaRossaの述べる「性役割モデル」としての父役割は、T.Parsonsが指摘したような「男性はInstrumental Role、女性にはExpressive Roleを」と言う時の役割規範と類似しており、また、「男性にはMasculinity、女性にはFemininityを」と言う時の役割規範としての「心性」を意味している。

(3) ここで言う父役割の「同時性」(synchronization)とは、文化的規範としての父役割と具体的な父役割行動とが、タイムラグ (time lag) を起こすことなく、一致している状態のことである。それに対して、「非同時

性」(asynchronization)とは、具体的な父役割行動と父役割規範との間にタイムラグ (time lag) が生じ、両者の間に起こる不適合状況を意味している。

## 文献

- Burke,P., An Identity Theory Approach to Commitments, *Social Psychology Quarterly*, 54 : 3, 239-251, 1991.
- Greenberger E. and O'Neil R., Spouse, Parent, Worker: Role Commitment and Role Related Experiences in the Construction of the Well-being, *Developmental Psychology*, 29. 181-197, 1993.
- Grimm,K.,& Perry,M. All in a Day's Work: Job Experiences Self-Esteem and Fathering in Working Class Families, *Family Relations*, 43, 174-181, 1994.
- Gronseth,E, Work Sharing: A Norwegian Example. In R.Rapport & R.N.Rapport (Eds.), *Working Couples*, St.Lucia, Queensland: University of Queensland Press, 1978.
- 柏木恵子 「子ども・育児による親の発達」 牧野カッコ・中野由美子・柏木恵子編『子どもの発達と父親の役割』59-72, 1996.
- LaRossa,R, Fatherhood and Social Change, *Family Relations*, 37, 451-457, 1988.
- O'Neil, R. and Greenberger, E. Patterns of Commitment to Work and Parenting: Implications for Role Strain, *Journal of Marriage and Family*, 56, 101-118, 1994.
- Russel, G., *The Changing Role of Fathers*, St.Lucia, Queensland: University of Queensland Press, 1982.
- 土屋みち子 父親の生活実態と父子のかかわりについて 家庭教育研究所紀要 14, 108-116,1992.
- 牧野カッコ 働く父親の家庭生活と意識 家庭教育研究所紀要 8, 42-51, 1987.
- 若松素子・柏木恵子・大野祥子 「親としての成長・変化の内容と影響要因」 牧野カッコ・中野由美子・柏木恵子編『子どもの発達と父親の役割』121-134, 1996.

## Summary

Nowadays, the ideologies surrounding fathers' roles have changed from "breadwinner" to "androgynous" roles in the wake of social and economic changes in Japan. The purpose of this research was to review issues concerning fathers' roles which have an impact on fathers' personal development, and to construct the hypotheses.

Hypothesis 1 indicated five responsive patterns which were constructed on the basis of synchronization of the fathers' roles as the cultural norm and their conduct. The type A was called adaptive pattern, which was described as accepting the norms of androgynous father roles and also behaving as androgynous fathers.

The fathers in this category might have high self-esteem and satisfaction. The type B was called maladaptive pattern, which was described as accepting the norms of androgynous father roles, while behaving as traditional father roles. The fathers in this category might experience guilt feeling. The type C was called deviant pattern, which was described as rejecting the norm of androgynous father roles, while behaving as androgynous fathers roles. The fathers in this category might experience constrained feeling. The type D was called traditional pattern, which was described as rejecting the norm and conduct of androgynous fathers. The fathers in this category might keep traditional self-identity. The type E was called innovation pattern, which was described as attempting to achieve unconventional father roles, while rejecting both traditional and androgynous fathers roles.

Hypothesis 2 was derived from the analysis of the relationship between the norm of fathers' roles and their conduct which would have an impact on fathers' personal development through the instrumentality of their resources and commitment to their parenting and occupational roles. In this hypothesis, the norm and conduct of fathers' roles were positioned as independent variables in relation to their personal development, fathers' commitment to parenting and occupational roles and resources as intervening variables, and their personal development as a dependent variable.